

カトリック時代エッセー

17

伝統を紡ぐ

川村信三神父 (イエズス会)

待降節にクリスマスの飾り付けをし、公現の祝日を過ぎると片付ける。毎年、繰り返している習慣です。私はこの時期にいつも一人の大学生のことを思い出します。名前はA君としておきます。早いもので彼と大学で共に活動していた時から20年の歳月が流れました。

私が勤める大学ではクリスマス・イブに大学主催のミサを学内で行う習慣が今でもありません。以前は、聖堂に見立てた大教室が大学正門から最も遠い場所に位置していたため、ミサに参加する人は大学構内の暗がりの道を凍えながら行くのが常でした。「皆、喜びに来たのに、寂しそうだ」。一年の時、そう感じていたA君はある決断をし、上級生になるとすぐに行動に出ました。学生部長に直談判し、聖堂までの道に「イルミネーションを設置してほしい」と願ったのです。

当時はまた「イルミネーション」を点灯することは珍しく、ごく限られた商業施設のアトラクション程度の存在でした。しかし、A君は本気で「光を見た人たちの心がすこしでも温かくなるように」、沿道全てでなくとも曲がり角の一つの木だけでも光をともらせたい。これが彼の望みでした。

A君はカトリック学生の会に属していましたので、イルミネーション設置をサークルの活動にしたいと仲間にも思いを打ち明けます。すると最初、仲間たちは困惑し、無駄なことだ、資金はどこから来るのか、なぜそのような無駄な

ことを言い出したのかとA君に詰め寄りました。やがて、A君の思いを察した何人かの仲間が賛同するようになっていきました。

同時に、A君は大学当局に「御百度」を踏みました。根負けした学生部長が、特例ではあるとしながら許可を与え、しかも必要な援助金を用意してくれました。

そして、待降節の日没後、夕闇に包まれたキャンパスの一本の木に光がともりました。今ではLEDが開発されイルミネーションの光の威力が一変しましたが、当時は風で吹き飛んでしまうような繊細な光の粒が一面に広がったように見え、それはそれで奥深さを感じたものです。光に「ぬくもり」があると実感したのは初めてです。それは確かにA君の心から伝わった熱だったのです。一本の木が見事に主の降誕を祝う灯(ともしび)へと変容し、過ぎ行く人々の心を照らし温めたのです。その結果を見た大学当局は、今後、学生の力でそれを続けるなら毎年少

ずつ光を増やしていくための資金提供を約束しました。大学のイルミネーションは、こうして学生が自主的に始め、そして守ろうとした特徴があったのです。

この「イルミネーション」(光のぬくもり)の話には悲しいエピソードを付け加えなければなりません。情熱家であったA君は卒業後、ある高校に教職を得て、持前の明るい性格、人への思いやりの気持ちからすぐに人気者の教師となりました。卒業してからもクリスマスには毎年後輩を訪ね、イルミネーションが成長しているのを心から喜んでいました。ところが、卒業の3年後、私たちのもとに突如、A君の訃報が舞い込みます。彼を知る誰しもが驚き、その事実を受け入れるために時間がかかりました。

その年、A君を慕っていた大学のカトリック・サークルの後輩たちの手で、あの「光のぬくもり」が再現されました。A君の死に涙した後輩たちは、その「弔い」の心を込めて光を点灯したのですが、その時の表情は鬼気迫る何も

のかを感じさせるものでした。

A君が放つ情熱の薫陶を直接受けた後輩たちも卒業し、やがてA君のことを知らない後輩たちも入学してきました。残念なことに、10年もすると大学にともされるイルミネーションは、大学が設置した、ただ季節の風物詩のような印象で続けられていき、当初の「心」を語る者がいなくなると同時に、イルミネーションの意味も変わってしまったようです。私はその「はじめの思い」を知る人間として、そのことを継承していけなかった自分を責めています。声大にしてその意志を語り継ぐべきだったのに、それができなかったことへの反省を込めて。

「伝統」とは何でしょうか。それは人から人へと伝えられるもの。しかも、当初持たれた強い思いを、その思いを共有していない後の世代に受け継ぐことが伝統です。それは、始めた人より、より大いなる情熱をもちいてこそ伝わるものなのかもしれません。

思えば、初代教会の使徒たちは「復活体験」を伝えるべく声を大にしました。そして、それを「信仰の遺産」として「復活体験」をしていない人々に熱意を込めて伝えました。日本の「潜伏キリシタン」たちは、先祖の信仰を「伝える」ために、組織を守り、伝承を大切に、そして希望を持って待ち望むことを心掛けました。「東洋の奇跡」と呼ばれた長崎の「信徒発見」の出来事も、そうした「伝統」を受け継ぐ意志が結実したものといえます。「伝統」とは心して(日々意志を新たに)紡ぐものです。

今年も、私の心の中にもつたあの「光のぬくもり」は、なぜかまったく「色あせず」、あの時の弱々しさの中にも強さを示してくれた姿でよみがえっています。



バチカンのクリスマスツリー (CNS)